



News Letter no. 27

ニュース・レター

日本図書館協会児童青少年委員会 2021. 6. 14

ISSN 2188-6067

シリーズ 児童図書館員養成専門講座のこれからを考える 第4回

引き続き、2013年から2019年に受講された方々から、

- 1 専門講座の思い出
- 2 今、何をされているか
- 3 2020年度予定していた講座内容を見て感想や提案をまとめて頂きました。

第4回目の今回は、7人の方の文章を掲載いたします。専門講座への提案として、

- ・対面での開催が理想だが、オンラインでの受講も検討すべき。職場に負担をかけないためにも、オンライン講座も組み合わせた研修方法が取れないか。
- ・課題の狙いなどを明示するか、気軽に質問のできる環境が欲しい。
- ・受講前に、受講生同士の情報交換をしたい。
- ・学校図書館、ボランティア、ヤングアダルト、旬の話題や本について、などの講座の開催を希望する。
- ・読書が苦手な子どもに対するアプローチの仕方など、様々なタイプの子どものその保護者に向けた案内について学ぶ場が、この講座の part2 としてあるといい。
- ・フォローアップ講座の開催を希望する。

今回で、「児童図書館員養成専門講座のこれからを考える」の連載は終了します。お忙しい中、執筆をお引き受けくださった皆様に感謝申し上げます。

児童図書館員養成専門講座を受講して

第 33 回(2013 年)受講生 国弘 明子
(川崎市立中原図書館)

2013 年に受講した児童図書館員養成専門講座は、とても貴重な経験でした。当時は職場の業務が多忙であったことと、家庭でも 3 人の息子の子育て中だったため、大量の課題を仕上げるのに休む間もない状態でした。しかし課題に取り組むことで講座への理解が深まり、受講中は充実した時間を過ごすことができました。また、ともに講座を受講したメンバーとの交流はかけがえのないものでした。受講後も互いの図書館を見学するなど、現在も連絡を取り合っています。メンバーが司書として全国で活躍していることは励みになります。

どの講義も心に残っていますが、押樋先生の「図書館の魅せ方」はとても新鮮でした。課題は自館を撮影して紹介したり、「読書の力」「司書（児童担当）の力」をテーマに標語を作るものでした。各館への先生のご指摘とアドバイスは的確で、知識や経験による柔軟な発想に刺激を受けました。標語の作成は、図書館員の力をアピールするだけでなく、標語を掲げることで身が引き締まり自身の役割を認識するのに役立ちました。そして「図書館の品格、魅力は図書館員の存在です」という先生の言葉に、積極的に PR すること、魅せることの必要性を学びました。杉岡先生の「選書・蔵書構成」のレポート作成は客観的に自館を分析するのに役立ち、各館の資料は今見返しても着想を得られる内容です。講義では蔵書の維持や基本図書の構築を学びました。グループ討論で意見交換ができたのもよかったです。

受講後は引き続き児童担当を、その後一般担当を 4 年間経験しました。現在は地域資料、視聴覚資料、障害者サービス、企画展示等を担当しています。児童担当時は図書の選定や、新しく購入した書架を工夫して各種コーナーを設けるなど、受講の経験を生かすことができました。現在担当の展示も一般書だけでなく、児童書も活用しています。

今年度の専門講座のカリキュラムのうち、「脳科学から見た子どもの読書の重要性」は科学的な根拠に基づくもので興味深いです。そして以前と変わっていないプログラムは、児童図書館員としての基礎を築くのに必要な講義です。また、ストーリーテリングやブックトーク等の実演は、現場でしか感じ取れないものがあるので対面が理想です。しかし、現在のコロナ禍の状況が長引くようであれば、児童図書館員の養成継続のためにもオンラインでの受講の検討が必要になってくるのではないのでしょうか。提案としては、読書が苦手な子どもに対するアプローチの仕方など、様々なタイプの子どもの保護者に向けた案内について学ぶ場が、この講座の part2 としてあるといいです。

講座でお世話になった方々に感謝するとともに、子どもたちと本との架け橋となれるよう、これからも日々努力を積み重ねていきたいと思っております。



「児童図書館員養成専門講座のこれからを考える」

第 34 回 (2014 年) 受講生 坂口 佐知子
(和歌山県立図書館、日本図書館協会認定司書第 1105 号)

職場や家庭の事情から児童図書館員養成専門講座（以下「講座」）の受講年齢が 50 代とかなり遅かった私は講座を受講し、「いつか講座を受講したいなあ」の“いつか”は自分がしっかり覚悟と熱意をもって行動しなければやってこないこと、そして「井の中の蛙」であることを実感しました。子どもの読書環境が変わり続ける状況の中、書物やネットで情報を得る、数時間の研修を受けるだけでは自身の力不足解消の手立てや他を動かせるパワーを得ることは困難です。講座を受けて即変わるわけではありませんが、講座で得た知識や考え方、技術、苦勞した課題の数々は自分のこれからの支えになります。そして受講した仲間がいる、心を込めて講義・指導してくださった講師、お世話をしてくださったスタッフの方々がおられると思うと自分ひとりじゃない勇気と気力がわいてきます。子供と子供の本の大切さ、人と人のつながりの大切さが心に深く届いた講座でした。

現在は児童サービス担当ではありませんが、児童サービスに関しては初任者研修の講師を担い、県の子供の読書活動推進に携わっています。

昨年の暮れ、コロナ禍で講座の同期生はどうしているだろうとぼんやり思っていたところ、リモート同期会をしようという運びになり、久々 ZOOM で集まりました。当時と違い、児童サービス担当でない方が多いのですが、やはり「子供の本・読書」に対する思いは皆さん変わっておられず、懐かしさと安心感、活力をいただける会になりました。年月が経っても、喜びも苦勞も悩みも素直に話せる、そんな仲間がいることをかみしめた一時でした。

講座内容については、今年度の受講カリキュラムが以前と変わらず、あらゆる角度から集中して学ぶカリキュラであることに安心しました。と同時に児童サービスには様々な機関や人々の関わりが必要であること、対象年齢を乳幼児からヤングアダルトまで途切れさせないことの大切さから、学校図書館やボランティアの関わり、ヤングアダルトに関する講座もあればと思います。



「児童図書館員養成専門講座のこれからを考える」への寄稿について

第37回（2017年）受講生 新井 悠
（さいたま市立大宮図書館・受講時）

①児童図書館員養成専門講座の思い出

当時、児童サービス担当3年目であり、応募資格をようやく満たしたばかりだった私は、児童図書館員養成専門講座（以下、「本講座」とします）の受講をためらっていました。しかし、「受講すれば良い経験になるから、ぜひ受講してほしい。」との前上司からの勧めがあり、本講座の応募を決意しました。

受講が認められてからは、通常業務をこなしつつ、事前課題の提出に追われる忙しい日々を過ごしました。

受講中は、“学び”と“気付き”の連続でした。一流の講師による講義を受け、他自治体の同期受講者と意見を交わすことで、児童サービス担当者としての視野が広がったように思います。同期受講者とは修了後も交流が続き、仕事においても私的な面においても励みになっています。

本講座修了後は、児童サービス担当者として、「児童が読書に親しむ」という組織の目標を達成するために自身は何ができるかを、主体的に考えるようになったと思います。そして、自館の児童サービスを向上させるために、自身のスキルを高めていきたいと思うようになりました。

②今、何をしているか

本講座受講の翌々年度に図書館から異動し、市長事務部局へ出向となりました。現在は、保険年金課で国民年金の業務を担当しています。

③今年度予定されていた講座内容の感想

本講座は、講義、実技、見学等が含まれ、充実した内容だと思います。また、事前課題を通じてたくさんの本を読むため、児童サービス担当者としての“糧”を得ることができると思います。

図書館から離れて実感したのは、市長事務部局の一般行政職員は、自治体を超えて同業種のつながりを持つ機会が少ないということです。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、残念ながら中止となってしまいましたが、全国の児童サービスの担い手の養成や交流のために、本講座を継続してほしいと願っています。



児童図書館員養成専門講座について

第 37 回 (2017 年) 受講生 林 圭子
(浦安市立中央図書館)

図書館員歴は長いものの児童サービスにはなかなか縁がなく、辛うじて子どもに関わる分館へ配属になって 2 年目、まさかの白羽の矢がたてられました。「いえいえ、児童サービスの年数足りないですよ」という私の言葉も、「大丈夫大丈夫、林さんは児童書いっぱい読んでるし、今まで分館に応援に行った日数を足せば〇年なんて優に越すって～」という〇先輩の前にはなんの効力もありません。プライベートで入っていた児童図書館研究会の活動も足して応募し、なんとか受講資格を得ることができました。

課題提出の締め切りに間に合わせるために速達で送っただの、果ては夜、協会の郵便受けに直接投函しただのの数々の逸話を BGM にして、なんとか課題に取り組む日々が始まりました。この時集中して課題図書を読んだり、今までと違った視点で絵本等を読み込んだりしたことは、確実に日常ではできない自己研鑽になったと思います。

実際に研修が始まってみれば、一回り以上年下の仲間たちとの久しぶりの勉強は思いの外楽しいものでした。準備してきた課題を元に先生方の厳しい講評をお聞きし、図書館を取り巻く様々な課題に、実践に裏付けされた示唆に富む方向性を示していただきました。読書に障がいを持つ子どもに読書環境を届ける方法、バランスの良い蔵書構成の作り方など日常の業務に紛れて後回しにしてしまう問題に改めて向き合う時間となりました。

この研修の中で一番印象に残っているのは、松岡享子先生のお話を伺ったことです。受講生 1 人 1 人の悩みや疑問を、些細なことでも軽んじたりせず真摯にお答えいただきました。またどちらかに決める必要はないと柔軟な考え方を示されたりしました。“望ましくない”本を求められた場合、ぱったり断るのではなく、一旦受入れて様子を見て閉架にまわす方法もあるとおっしゃった事、気持ちが楽になり、肩の荷が下りた気がしました。

さて現在の私ですが、研修を終えた翌年に分館係を離れ図書資料第 1 係へ異動しました。また中央図書館の大規模改修に関わる業務の担当となり、臨時事務所への引越し、休館中サービス、蔵書構成案の作成、そして新図書館へ再びの引越し、開館準備と慌ただしい日々を過ごしました。そして令和 2 年 3 月のリニューアルオープンと前後して、新型コロナウイルスの感染拡大防止の対応に追われる日々が始まりました。そんな中、全国から集まってきた仲間たちからもらう情報やエールは、元気を与えてくれます。

研修を受けていて一番困ったことは、課題の意図がよくわからず見当違いな苦勞をしたり、時間がかかってしまったりしたことです。課題の狙いや作成方法（形式的なものではなく）を明示していただくと良かったと思います。また気軽に質問を受ける環境を作ってくださいるといいかなと思います。受講生同士の情報交換も、前期が始まるまではできな

ったので、それもできるようにしていただけると良いかと思ひます。

集中して課題に取り組むと言う点は、この講座の長所であるとは思ひますが、忙しい現職に負担を強いるところでもあります。この長所を手放す事になりますが、一気集中ではなく、課題を長期間に渡って課し、1つ1つ提出させ、数ヶ月に1回講座を行う。全国から1カ所に集まるという長所が実施できない現在の社会情勢だからこそリモート講座を組み合わせた長期的な研修計画を作成したらどうでしょうか。受講生同士の交流も、顔を合わせなくてもできる方法で考えていただきたいと思ひます。準備をする事務局の方も大変かと思ひますが、受講生のやりがい（苦しみ？）も長期にわたり、受講生同士の結びつきはより強固なものになるかもしれませんね。



「児童図書館員養成専門講座の思い出」

第 39 回 (2019 年) 受講生 寺井総子
(さいたま市立北図書館)

図書館での職務年数は 20 年を越えたものの、児童担当者としては、ようやく 10 年を過ぎたところ。長く専任でやってきた職員の自信に満ちた仕事ぶりを見ていると、知識も経験もかなわないと感じながら日々過ごしていました。「必ずいい経験になるから！」と上司に背中を押され、2019 年、受講の申し込みを決めました。

講義の内容は、バラエティーに富んでおり、いずれも勉強になりました。講座中は、緊張もあり失敗ばかり。自分の力はこの程度かと意気消沈もしましたが、自分の好きなことを学ぶ楽しさを存分に味わいました。同志が集まり、純粋に図書館のことだけを考えられる幸せな時間でした。カウンターワークの重要性を再認識し、ブックトークやストーリーテリング、科学あそび等の演習では、発表だけでなく各館の事例やアイデアを共有することができ、とても参考になりました。

個人的に楽しかった講座は、宮川健郎先生の児童文学講座でした。日本児童文学の流れは、はじめて知ったことも多く、自館で行う研修ではなかなか実現できないような内容の濃い講座でした。また、詩や幼年文学の紹介も新鮮でした。宮川先生が読んで聞かせてくれた『すみれちゃん』（石井睦美作 黒井健絵 偕成社）は、本当に楽しくて、その後、自館でのブックトークにも取り入れました。作品の面白さを知ること、本に対する愛着が深まり、その熱が、本を紹介した子どもたちにもちゃんと伝わるのだと、その後の実体験でも強く感じています。

一番衝撃を受けた講座は、松岡享子先生の講座でした。もちろん、「松岡先生の講座を受けられるのだ」という高揚感もありましたが、内容は思い描いていたものと全く違っていました。松岡先生は、まず、自己紹介とともに一人ひとりに、各々の図書館の現状や課

題を発表させました。柔らかな物腰と絶妙な問いかけに、その場は段々と自分の悩みを吐露するような空間になっていました。立場も思いもさまざまでしたが、その悩みには共通点があったように思います。時に驚き、時に共感しながら、皆、一心に話を聞きました。「何が問題?」「どうしたらいい?」—その後のディスカッションで大きな課題が導き出されました。講座の中で課題が解決されたわけではありませんが、終了後は不思議な充足感で満たされました。短い時間の中で皆の心を軽くし、図書館界の大きな問題を私たちに気づかせてくれた講座でした。さらに、この日をきっかけに参加者同士の距離がぐっと縮まったことも忘れられません。

職場の中で、職員同士が、たわいもないことをおしゃべりする時間はとっても大事。気軽に愚痴を言ったり、考えを言い合ったり。その中で安心したり、満たされたり、何か導き出されたりする。そういう場が大切であり、そういう研修があってもいいのだということをおっしゃっていました。

4月に現在の図書館に配属になり、仕事の内容やルールも変わりました（生活様式まで!）。それでも、どの図書館でも、どんな状況でも、鍵となるのは「人」なのではないでしょうか。図書館を担う「人」を育てて理念を継承する。講座で学んだ言葉を思い返し、重要な未来の課題をしっかりと感じています。



「児童図書館員養成専門講座」を受講して

第39回（2019年）受講生 前田 朋美
（芦屋市立図書館）

2019年度に受講させていただきました。申込時の提出課題に取り組む段階から、既に講座は始まっていて「児童サービス漬け」の贅沢な時間を過ごさせていただきました。講義は受講生の発表や意見を求められることも多くあり、緊張も強いられました。2日目の川上先生の講義は特に印象に残っています。「子どもはなぜ本を読まなければならないのか?」の問いに対し、日頃から知識ではなく、心掛けをしっかり持つ「子どもを知ることが大事」「一歩踏み込んで仕事する」など、目の前の子どもを想定した話や、組織を動かしていくためにはどう行動・計画で示していくかなど、具体的で現実的なレベルで考える癖をつける必要性を痛感しました。「図書館の魅せ方」「乳幼児サービス」「ブックトーク」「ストーリーテリング」「科学あそび」では、受講生各々の発表を見ることができ楽しませていただきました。これまでストーリーテリング以外はあまり見る機会がなかったので、自館に帰ってから率先して行いたいと思いました。また複数の講義で、児童図書館員として本を評価することについて考えさせられました。私は基本図書に触れる機会が多いですが、その周辺にある本を読み判断するまでに至っていないのが課題でした。この講座で沢山の本に触れ、自身の読む幅を広げられたのは収穫でした。今は

担当者の感覚に頼りがちだった新刊の選書方法も見直し、レビュースリップを書いて、より複数の職員で読み判断するようにしています。

自館でこれまで開催していなかった「乳幼児のおはなし会」や「科学遊び」の準備をしていましたが、コロナウィルス感染拡大の影響でやむを得ず中止となりました。定例で毎週行っていた絵本の読みきかせやおはなしの会もしばらく中止となり、7月から感染対策を徹底しながら、これまでと少し異なる形で再開しました。(2021年1月現在、緊急事態宣言発令の為、再び中止。) 予想もしていなかった事態に頭を悩まされることが多い1年でしたが、新しい試みにも取り組める良い機会だと捉え、担当職員やボランティアの方々とで出来ることを模索しています。電子書籍の需要が高まり、動画での読みきかせ等もよく目にするようになりましたが、少し戸惑いも感じます。時代や世の中の状況に応じながらも、児童図書館員としての軸をぶらさずに仕事をするとはどういうことなのか、常に考えていかなければと思います。私事ながらこの1月から産休に入ってしまい、あまり職場に講座の成果を還元できていませんが、復帰後に中止した行事の開催や他の職員の専門性向上に働きかけができればと思います。

今年度予定していた養成講座のスケジュールを拝見すると昨年と変わらないようですが、それでよいと思います。様々な境遇や考えを持つ同期と机を並べるなかで、基本的なこと、またそれまで経験がなかったり知らなかったりすること、いずれについても自分にとって新たな学びにつながりました。普段とは違う場に身を置くことで、自館の児童サービスを見つめ直すと同時にヒントも得ることができました。講座の大枠はそのままよいと思いますが、課題や講義のなかで旬の話題や本を取り上げられればよいと思います。私が受講した時はちょうど「ニューヨーク公共図書館」の映画が上映されたばかりで、松岡先生の講義で話し合う時間がありました。このご時世、オンラインでの講座実施も考慮されるかもしれませんが、あの臨場感に勝る経験はないと思います。同期とのつながりも然りです。早くコロナウィルスの状況が終息し、養成講座が元のように再開できることを心から願っています。



「児童図書館員養成専門講座」受講を振り返って

第39回(2019年)受講生 堀田 直美
(清瀬市立元町こども図書館)

2019年に受講させて頂きました。現在は本講座受講のきっかけとなりました、地域館の元町こども図書館に引き続き勤務しております。

この度ニューズ・レター寄稿依頼のメールを頂き、職場での立場や環境が全く異なる受講生に対して、一人一人と真剣に向き合い全力で講義をして下さった講師の方々と、千本ノックのような講座の課題に苦しみながらも、必死に取り組み一緒に涙した同期の受講生への感謝の気持ちから、僭越ながら寄稿させて頂くことに致しました。

